

# 生活の主体として「体験」と「思考」を重ね 過去・現在・未来の「人との関わり」を思い描く

ある先生から聞いた悩みです。「社会課題を考える活動には食いつく生徒でも、生活課題を考える活動だと反応が薄い」それは生徒が「生活の主体」になっていないからかもしれません。生徒が生活主体として未来を描く実践をご紹介します。

取材・文／松井大助  
撮影／小林太樹



家庭科  
永井敏美先生

大学院卒業後、高校教師に。北陸家庭科授業実践研究会で、思考を深める授業の実践に取り組む。同研究会の編著に『考えるっておもしろい 家庭科でつなぐ子どもの思考』など。2016年に刊行された県の副教材『とよみの高校生 ライフプランガイド』にも編集委員として参加。

「やってもらっている」生徒に  
生活に対する問題意識を育む

富山県は持ち家率全国1位で、祖父母との同居世帯が珍しくない地域だ。同県にある砺波高校には、住み良い環境で大勢の大人に見守られて育った生徒が多い。そのうえ生徒たちは、基本、進学希望で、独り立ちはまだ先と思っているので、当面の生活についてはまず心配がない。

その環境は良いことだが、見方を変えれば生活面で「これはどうすればいいの」「もつこうできた」といった問題意識が芽生えにくい、ということだ。

そのままでは社会に出たときに「二つの面で困るのでは」と永井先生は考える。

一つは、自分が「生活の主体」になる準備ができていないことだ。

「日常生活で今は親御さんなどに『やってもらっている』ことを、自分が『する』や『つてあげる』側に回る時期がいざ来ます。その転換をいつするかですね」

もう一つは、働くうえでも重要になる「生活者の視点」に欠けることだ。

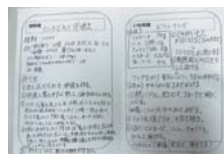
「保育や介護だけでなく、まちづくりでも建築でも、車のデザインでもロボット開発でも、どんな仕事でも目指すことは『人々の生活を良くする』ことに行き着くと思っんです。例えば本校のOBには、アザラシ型ロボット『パロ』を開発された方がいます。お年寄りや自閉症の子のセラピーに効果をあげ、生活を豊かにしているロボットです。これからの社会の担い手となる生徒たちには、日々の生活の中

でどういう人がどんな思いをしているかを、感じ取れる人になってほしいのです」

他者との関わりの中で  
これからの生活を考える

だから、1年生が受ける家庭科の授業では、生徒がさまざまな生活シーンを「主体的に体験・思考する」ことを重視している。ある世代の生活を擬似体験したり、結婚や育児について自分ごとで考えたり。その中で生徒たちが、「生活とは他者と関わりながら自分たちで形づくるもの」と感じてくれることを期待している。

例えば4月の授業開き。調理実習で班ごとに味噌汁を作るのだが、永井先生は、豆腐、ネギ、味噌などの材料だけ用意し、作り方は生徒たちに任せるとい



調理実習は協働作業。3学期のお弁当コンクールでは、最初に3時間かけて、味・栄養・見栄えの良いおかずの構成を各班が考え、必要な材料から調理の手順まで文書にする。そして2コマ連続でお弁当作り。チームで挑むプロジェクトなのだ。



保育実習では子どもの遊び相手を務める。高齢者疑似体験ではゴーグルやヘッドホン手袋をして見えづらい・聞きづらい・つかみづらい状態を体験する。



「味噌汁の味や、豆腐の切り方は、各家庭で違います。そこを任せて『今日は味噌汁の作り方より、生活背景が違う人と一緒に活動することを学んで』と伝えるんです。『同じ地区の私たちでもこれだけ違うのだから、グローバルと言われるけれど、生活習慣や文化が違う人と集まったらもつとだよね』とも投げかけます」

生徒は考える。今後誰かと生活を共にするなら、どう折り合いをつけようか？

座学の授業では、国内のフードロスや世界の飢餓状況を示したハンガーマップについても学び、自分の食生活を、地域や世界とも結び付けて考えていく。

夏から秋には体験学習が白押しだ。保育実習や、乳児と親を招いてのふれあい体験。子育ての楽しさと大変さの両面をかいま見る。高齢者疑似体験や車椅子



結婚や育児について話し合う授業では、付箋とホワイトボードを活用。班ごとに話し合っ



子体験。祖父母への接し方が変わったたり、それまで見過ごしていた駅前のスロープに自然に目が行くようになるそうだ。

2学期以降は将来の生き方についても考える。例えば「結婚」「親になること」「働くこと」について各1時間。使う教材は、永井先生も制作に携わった『とやまの高校生 ライフプランガイド』だ。

その授業では、まずはグループの話し合いで生徒の思いを引き出し、そのあとで思考を揺さぶるトピックを紹介する。未婚率の増加、赤ちゃんポスト、ベシックインカム、障害のある人が生き生きと働く会社。そのうえで改めて問いかける。

「結婚への理想と現実のギャップを解消するにはどうすればいい？」

「どんな価値意識をもって働きたい？」

「40人いれば40通りの答えがあつていい」



授業の最後には「学んだこと」「考えたこと」を生徒が自由に書く。永井先生はその記述を「自分の授業への評価」ととらえ、授業を見直す参考にもしている。

### 自分を見失いやすい10代に生活の主体になれる自信を

実は授業でもう一つ意識していること

と永井先生がくり返しているのが、意見を出し合うときも生徒はリラックスして楽しく。でも、男子と女子で結婚や育児の考えの違いが見えてくるなど、生徒はさまざまな気づきを得ていく。

「生き方について、教師は生徒に正解を与えられません。自分の人生をどうしたいのか。まわりの人の生活もより良くしたいならどうすればいいか。そうしたことを『他者と関わりながら、自分で考えていく力』を育みたいと思っています」

1年の締めくくりはお弁当コンクール。生徒がチームで献立を考え、お弁当を作り、先生たちが試食して1位や2位を決める。味・栄養・見栄えをどう両立させるか考える課題解決学習であり、「毎日お弁当を用意してくれている保護者の思いに気付く機会」でもあるそうだ。

「知らない自分」が出てくるんですよ」

なぜ自己肯定感を高めたいのか。

多感な高校生は、自分に否定的になることがあり、ともすれば自分を見失うからだ。例えば進学校である砺波高校の場合、受験にも真剣だからこそ、定期試験や模試の成績が悪いと、生徒によっては必要以上に自分を過小評価してしまう。

「もちろん試験もがんばってはほしいけれど、他にもモノサシがあることを知ってほしいんです。『自分をありのままに受け入れる』といった自己肯定感の核となるものができれば、これからの人生で学ばべきことは、私が教えなくても、生徒が自分でつかみとっていきますから」

がある。生活シーンを体験・思考することを通して「やってみようという意欲」や「知らなかった自分の発見」をもたらし、生徒の自己肯定感を高めることだ。

例えば調理実習では、リンゴの皮むきや玉ねぎのみじん切りなど、毎回「全員がやる」と指示される課題がある。挑戦できたという実感を得られるようにだ。

また、毎授業、最後には「学んだこと」や「考えたこと」を自由に記述することを生徒に求め、期末試験でも「この学期で何を学んだか」を書く問題を出す。生徒が手にしたものを自覚できるように。

それ以上に自己肯定感に影響するのは「他者との関わり」そのものだという。

「保育園の子から『また来てね！』と言われたときの表情とか、同じクラスでも普段は話さない子と協力できたときの笑顔とか。生徒の中から、『今までの自分じゃない自分』が出てくるんですよ」

#### ■ 砺波高校(富山・県立)



#### School Data

普通科/1908年創立  
生徒数(2017年度) 598人(男子319人・女子279人)  
進路状況(2016年度実績)  
大学159人・短大4人・専門学校6人・その他(次年度受験者)19人  
〒939-1385 富山県砺波市東幸町3-36  
TEL 0763-32-2447  
URL <http://www.tonami-h.tym.ed.jp/>

#### Outline

教育目標に「地域から信頼・期待され、地域の伝統・文化を理解し、継承できる人材を育てる」「職業人として生きるために必要な知識や技能を身に付けた人材を育てる」ことなどを掲げる。国公立大学現役合格率が高い。富山県教育委員会より2016年度ICT教育モデル校に指定され、普通教室すべてに無線LANアクセスポイント・プロジェクタ・スクリーンを配備し、授業でタブレットも使うなど、ICTの活用も推進中。



## 人生を送るうえで大切なことを 生徒が考えて学べるような授業を

砺波工業高校  
数学  
池端正樹先生

永井先生とは、砺波高校に異動される前まで、本校で一緒にしていました。工業高校なのですが、担任したクラスについて家庭科の授業の話をするのが結構あって、傍から見てエネルギーに組み込まれているのがわかりました。乳幼児とその親を呼んでの授業とか、お弁当コンクールとか、車椅子体験とか。

共感したのは授業の目指す方向性です。僕の教科は数学ですが、目先の試験に備えるだけの授業ではなく、人生を送るうえで大切だと思うこと——例えば思考力や協働する力を育てるような授業をしたいですね。永井先生の家庭科の授業は、生活の身近なテーマを基に、そうした生きる力を伸ばす授業だと感じました。

授業のほかに、学校行事や部活動にも熱心でした。さまざまな学校の活動全体を通して、生徒と向き合う先生だと思います。

「本当は他教科の教師になりたかったのですが、家庭科を選んだのは、目指していた大学の中で、自分の試験の点数で入れ

入らず、通知表に欠点がついたそう。」「高校時代、家庭科は女子のみ必修で、同じ時間に体育の授業を受けている男子を羨んでいた。家庭科の授業には身が

好きじゃなかった家庭科のイメージが一新された日

授業ができるまで

「永井先生は、子どもの頃から教師になりたかったという。ただ、最初から家庭科の教師を目指していたのではない。自身の高校時代、家庭科は女子のみ必修で、同じ時間に体育の授業を受けている男子を羨んでいた。家庭科の授業には身が入らず、通知表に欠点がついたそう。」「本当は他教科の教師になりたかったのですが、家庭科を選んだのは、目指していた大学の中で、自分の試験の点数で入れ

入らず、通知表に欠点がついたそう。」「高校時代、家庭科は女子のみ必修で、同じ時間に体育の授業を受けている男子を羨んでいた。家庭科の授業には身が入らず、通知表に欠点がついたそう。」「本当は他教科の教師になりたかったのですが、家庭科を選んだのは、目指していた大学の中で、自分の試験の点数で入れ

初任校には家政科があり、その学科の生徒に限っては、将来の職業を見越して保育所や高齢者施設での実習が行われていた。あるとき、永井先生は思う。「乳幼児やお年寄りに関わることは、誰の生活にでも起こりうることで、誰だから、異世代と関わって学ぶ機会は、すべての生徒にあってほしいと考えた。そこで近隣の市町村役場や保育所、20カ所に自ら連絡して交渉。普通科の生徒も、家庭科の授業の一環で、保育所や高齢者施設を訪ねて交流できるようにした。さらに永井先生は、出産した知人と赤ちゃんを招き、生徒が乳児とふれあう授業も始める。その後、地域の子育て支援センターに相談、授業に来てくれる親子

異世代と関わる場を開拓  
生徒の他者・自己理解を促す

「異世代と関わる場を開拓」異世代とふれあう体験学習や協働での調理実習のほか、永井先生は座学の授業でも「グループの中で一番手が大きい人が発表」などと生徒同士が関わる場面(手の大きさ比べなど)を意図的に作っている。他者と関わる、それも五感で感じることで、他者理解・自己理解につながるかと考えているからだ。



異世代とふれあう授業では、生徒たちの優しい表情や笑顔に永井先生自身が胸を打たれるそうで、だから写真をたくさん撮って、家庭科室の廊下側の壁に貼り出すようになった。



### 1 生活について空間軸(家庭→地域→世界)と時間軸(過去・現在・未来)をもって思考する

永井先生の授業の特徴は、生活について家庭から世界、過去から未来まで見すえていくことだ。例えば衣生活領域では、昔もこの先も自分または誰かが担うことを前提に基礎の裁縫を学び、座学では衣服の原産国や児童労働のことも考える。生徒にとっては未来の社会のあり方を考える第一歩になる。

### 2 教えるのではなく生徒自身が体験・思考し、毎授業「何を学んだか」を言語化する

生徒には「家庭科に正解はない」と伝え、衣食住ほか生活をどうしたいかは、体験学習や生徒同士の議論から自分で考えてもらい、そこでの学びを最後に自由記述させている。前任の工業高校でも砺波高校でも、これをくり返すほど生徒の思考は深まり、社会のことにも目が向くようになったという。

### 3 高い要求や視野を広げるトピックで揺さぶり生活の課題と自分の成長を感じさせる

調理や裁縫の実習では「納期を守って良品を作る」ことをあえて要求。座学では、生徒から意見を募ったあとで視野を広げるトピックを提示、さらに話し合ってもらう。生徒が生活の課題に気づき、そこに挑戦したり思考を巡らしたりすることで自分の成長を感じる。そんな体験をしてほしいからだ。

### 4 ふれあう・話し合う・協働するなど他者と関わる場面を意図的に増やす

異世代とふれあう体験学習や協働での調理実習のほか、永井先生は座学の授業でも「グループの中で一番手が大きい人が発表」などと生徒同士が関わる場面(手の大きさ比べなど)を意図的に作っている。他者と関わる、それも五感で感じることで、他者理解・自己理解につながるかと考えているからだ。

**問いかけられる授業で、  
将来が楽しみになった**

—これまでの家庭科の授業で印象に残っていることを教えてくださいませんか？

辻原「保育園を訪ねた授業です。小さい子の考え方が面白いなあ、と。自分もこうだったのかなと、昔の自分を眺めとるようで」

松井「お母さんと赤ちゃんを招いた授業です。赤ちゃんは可愛いけど、お母さんは子育てで工夫や苦労もされていて。私も将来、子育てをすることになったらがんばりたい、と思いました」

中澤「その授業でお母さんが『すごい大変やけど、すごい楽しい』と笑顔で語られていたのが、幸せそうで、すてきでした」

小林「ゴーグルや手袋をしてのシニア体験の授業です。自分たちにはまだ遠いことだと思っていたけれど、将来こうなるんだと思ったら、高齢者の方に優しくせな、と自然に思えました」

—永井先生はどんな先生ですか？

松井「ずっとしゃべっているイメージがあります(笑)。でも、先生だけが話すわけではなく、皆で話し合う授業が多いんです」

中澤「いつも私たちに問いかけてくる感じで。それぞれに考えてほしいのかなあ、と思っています」

小林「質問をすごくしてくれるので、受け身にならんというか。一方的に教わる感じではなくて、皆の意見を聴いてくれます」

—家庭科の授業を通して「何を学べた」「何が変わった」と感じていますか？

中澤「こうした授業がなかったら、将来のことについては堅苦しい気がして、友達とあまり話さなかつたと思います。皆のいろいろな考えを知れてよかつたし、将来が楽しみになりました」

辻原「どんな働き方やパートナーがいいかは、『都会に出るか』『地元に残るか』にも関係してくるし、それによって大学選びも変わるので、進路選択につながることも学べたと思います」

松井「将来のことを考えるなかで、『大学に行くため』だけでなく『その先の生活のために』『こうりたいから』勉強をがんばろうと思えるようになりました。それがよかったです」



左より、小林玄征くん、辻原壮汰くん、中澤凜さん、松井楓さん

**生徒はこう変わる**

**生活面の周囲の支えを実感  
「社会を創る」側に向かう**

生活について主体的な体験・思考を重ねると、生徒は、今までの暮らしが周囲に支えられてきたことを実感するという。「どの領域の学習でも、授業の振り返りで『親に感謝したい』と書く子が出てくるんです。親御さんに「反発していた生徒が、その親も必死だったことに自ら気付き、態度が変わったこともありました」と同時に、今後はその「生活を自分で形づくる」という思いも強まっています。

「家庭科で学んだことは、空間軸で言えば『自分↓家庭↓地域↓日本↓世界』の生活まで、時間軸では『自分の過去・現在・未来↓次世代』の生活までつながられます。自分一人の未来ではなく、社会を創っていく主体として、皆と共に生きる未来を描いてほしいと思っています」

実際、生徒の視野は空間軸でも時間軸でも広がったことが、1年間の授業を受けたあとの感想からもみてとれる。「将来についてとても考えるようになった。そのために今すべきことは勉強だと改めて確認できた。子どもは何人欲しい、こんな職業についてこんな生活をした、だから勉強しようと思うようになった」「自分のこと、家族のこと、友達のことまでいろいろなことを考えさせられた」「ほとんどの授業から親への感謝を学んだと思う。次は、自分たちが将来を担っていくかなければならないことや、感謝の

気持ち忘れず、これからの毎日を過ごしていきたいと思った」

「ニュースをみていると家庭科で学んだことに結びつくものが多く、自然に興味をもてた。自分の意見をつくらることが得意ではなかつたのに、当たり前のようになてきた。親との会話の中で、社会やこれからのことについて話せるようになったのは、とても嬉しかったし、大人の仲間入りが少しできた気がした」

家庭科の授業を通して「生き方のシミュレーションができた」と表現する生徒がいるという。永井先生はそんな授業の最終日に、いつも生徒にこう伝えている。今まではあなたが自分の家庭や仕事の中で本当にやっていたんだよ。だから、「これからは毎日が家庭科！」



**授業で生徒に育みたい要素**

	知識	能力	意欲・態度
<b>育みたい要素</b>	<p><b>生活に必要な知識</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>選んで着るための知識(衣生活)、楽しく安全に食べるための知識(食生活)、人間らしく住むための知識(住生活)、消費社会を生きるための知識(消費生活)、支えあい共に生きるための知識(保育や高齢者との関わり)など</li> </ul> <p><b>地元・日本・世界の生活の実態</b></p>	<p><b>学んだ知識を活用する力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業で得た知識を生かして、お弁当を作ったり、大学進学後の自分の暮らしを住まいの選択から生活費の算出まで含めて考えたりする</li> </ul> <p><b>他者と関わる力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>座学での意見交換、チームで行う調理実習、乳幼児や高齢者とふれあう授業などを通して、多様な人と関わることを体験する</li> </ul>	<p><b>生活の主体となる意欲／自己肯定感</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活面で親などに任せられていることを、生徒がする側からとらえ直し、自分ならどうしたいか何ができるか考えたり、体験してみたりする</li> </ul> <p><b>違いを認めながら力を合わせる姿勢</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒同士がお互いの価値観の違いを認め合いながら、結婚や育児の問題を話し合ったり、チームで一つの料理やお弁当を作ったりする</li> </ul>
<b>それが今・将来にどう生きる？</b>	<p><b>自分の生き方を考える材料になる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>過去の生活をとらえ直したり(家族が何をしてくれたかを含む)、今の生活を見直したり、将来の生き方を考えたりする材料になる</li> </ul> <p><b>社会のあり方を考える材料になる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活に必要な知識に加えて、地元・日本・世界の生活の良い面や課題を知ること、より暮らしやすい社会のあり方を具体的に考えられる</li> </ul>	<p><b>今・将来のために知識を学ぶように</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>知識が役立つことを実感し、家庭科に限らずさまざまな知識を「今の生活や将来のために学ぼう」という姿勢をもてるようになる。</li> </ul> <p><b>知識と肌感覚の両面を生かせる人に</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>知識を活用しつつ、それだけに頼らず、人と関わって感じたことも大事にして、生活のあり方や社会に必要なモノ・サービスを考えたいける</li> </ul>	<p><b>自分たちらしい生活を形づくれる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>家族やパートナーと暮らすとき、自分の考えをきちんと表明し、相手の考えも聞きながら、お互いにとって良い生活を考えていける</li> </ul> <p><b>社会を創っていく主体になる</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>仕事や地域活動において、生活者の視点を持ちながら、どんな社会にするために何を生み出していくかを、多様な人と一緒に考えていける</li> </ul>